

## 基礎魔法理論

# Basic Magic Theory

この家で一番上等なリクライニングチェアに腰掛け、悠々とコーヒーを啜るソイツを後ろから蹴り飛ばさなかったのは、そうする前に話し掛けられてしまったからだだった。

その席は彼女のお気に入りだった。裁縫仕事で疲れたときにゆっくりとくつろぐ為、魔法研究で凝り固まった体を心身共に解す<sup>ほぐ</sup>為、なんとはなしに昼下がりの陽気に誘われてうたた寝をする為、エトセトラエトセトラ……とにかく、自分の家の中でも特に他人に侵入されたくない聖域の最奥だった。

こっそりとブーツにかけた魔法を解く。鋼鉄の硬度まで強化された踵がフツと軽くなり、アリス・マーガトロイドは不機嫌な声を上げた。

「……パチュリー。最初にそこは座らないで言ってやったわよね。これで何回目？」

「ほぼ毎日だから、三日目辺りで数えるのを止めたわ。日課があるって素晴らしい事ね。あとひとつアドバイスすると、弱点はあまり曝<sup>さら</sup>け出さない方が良いわよ、アリス」

椅子に腰掛けた相手——パチュリー・ノーレッジは振り向きもせずにもう言ってきた。

普段は物静かでお互い干渉する事はない——が、一度触れ合えばこの通り、バチバチという音が聞こえそうなほど火花を散らしながら衝突する。

（お互い嫌いって訳じゃないんだけどね……なんかこー、こうなっちゃうのよね）

誰に言い訳するでもなく、心の中で分析にもならない分析をする。嫌いでもない相手に衝突する理由というものが思い当たらず、アリスは内心首をひねった。どうしてこうなったのかと言えば……こうなったからとしか言い様がない。

（改めて考えてみれば奇妙なものよね。コイツがウチに転がり込んできて、もう三年も経た……）

それこそどうしてこうなったのか。唐突に現れて家に帰れなくなった泊めろと言われ、気が付けば事態の本筋にもあれよあれよと巻き込まれていったような気がする。こうして言葉にしてみるとアリスが流されるままに来てしまったように見えるが、事實言い訳のしようもなくその通りだった。

（なんでこう、私の周りには人の事情を斟酌しんしゃくしない奴ばかりなのかなー）

しかしまあ、そんな奴らばかりだからこそ成り立っている世界だとも言える。そうでなければこうも頻繁に異変が起きたりはしないだろう。この幻想郷——忘れ去れたものの流れ着く、常識と非常識の境界の向こうに広がる世界——は、他人に迷惑をかけない事を

知らない連中ばかりの世界だ。そもそも人様に迷惑かけずに生きる事の出来る者などいない。ならいつそ——という訳でもないが、思いっきり迷惑をかけて、巫女が痛い目見させて解決する。なんとなくそういう図式が出来上がって、それがまかり通ってしまったような世界だ。みんな大らかなのかどうか知らないが、それで何もかも受け入れてしまった。ちやらんぼらんだが、だからこそこの世界そのものもみんなに受け入れられている。

それに斟酌しんしゃくしないといえ、自分が実家を飛び出したときも似たようなものだった。周りの意見を無視して家出同然に飛び出してきたのだ。

（あの時偶然あの人に出会わなかったら、野垂れ死のたんでたかも知れないなー）

ゾツとしない想像だが、今にしてもそう思う。家を出たは良いものの、行く宛などある筈も無く、魔法の森に迷い込んだのだ。その日は蒸し暑く、高温多湿の環境に持って来た食料は直ぐにダメになってしまった。水も底を尽き、覚束ない足取りで彷徨い歩いていたところでひとりの人間に出会った。この家はその時助けてもらった人間に、どうせ自分ではほとんど使わないからと譲り受けたものだ。かなりの改造と増築を施しているものの、ベース部分の間取りは当時のままになっている。共に居た日数は少ないが、あの人間の事は今でもはっきり思い出せた。金髪に黒い三角帽の——

「アリス？ 話聞いている？」

「えっ？」

鼓膜こまくを震わせた声に、アリスの意識は現実世界に引き戻された。パチュリーが怪訝な顔でこちらを覗き込んでいる。

「あ、ああ……ええと、なんだったかしら？ ごめんなさい」

ひとりで喋っていたパチュリーの言葉を思い返そうとして出来ず、アリスは素直に謝罪した。そもそも言葉を捉えようという意識が無かったのだ。いくら掘り起こそうとしても思い出せる筈が無かった。

「だから、フランの事よ。あの子の属性の事だけ」

始めからアリスが話を聞いていなかった事に気付いていたのだろう、パチュリーは機嫌を損ねた様子も無く最初から説明を始めた。

「おおよそ想像通りだとは思うけど、あの子の魔力は破壊や衝動といった方面に流れやすい。大規模で高威力だけど、単発的なのが難点……」

「まんま子供じゃない」

「そうね。これくらいなら高価で精密な魔力判定機なんて使わなくても分かるわ」

伝えるところは余すことなく伝えてくれるが、きつちりと皮肉も入れてくる。昼間の惨劇を思い出し、アリスはこめかみの辺りに疼痛を覚えた気がした。

とりあえず痛みは脇に置いておいて、アリスは話を進めた。

「まあ、それならまず間違いなく火属性向きね。どうする？ 私は長所を伸ばしていくのが良いと思うけど」

「教育方針としては悪くないと思うけど。でもそれよりまず先にやる事があるわね」

真剣に言うパチュリーに、アリスは疑問符を返した。

「やる事？」

「決まってるでしょう。アンタ気付かなかったの？」

パチュリーは立ち上がると、鼻息荒く宣言した。

「あのメチャクチャな構成式を矯正するのよ！」

魔王が予言されてから三年が経った。

全てはその時から始まったと言える。あるいはその前から予想されていたのかも知れないが、少なくともアリスにとってはその時からだ。

紅魔館の閉鎖。そして、そこから脱出してきたパチュリー・ノーレッジとフランドール・スカーレットの保護。

つまりは、レミリア・スカレットの魔王化だった。

紅魔館は、幻想郷を紅い霧が覆った「紅霧異変」以降表に出てきた洋館だ。主は「永遠に紅い幼き月」——吸血鬼レミリア・スカレット。パチュリーは彼女の親友で、元は紅魔館の中にある図書館に住んでいた魔女だ。そしてフランドールは彼女の実の妹である。姉と同じ吸血鬼で、魔法に秀でた才を持つ。

現状は紅魔館の閉鎖から事態に表立った動きはなく、実害もない。だからこそ警告があっても巫女は動けなかった。異変解決の専門家である博麗の巫女は、幻想郷のバランスとして機能する。時として大き過ぎる力を発揮する巫女だからこそ、幻想郷のバランスに何の影響も与えない現在の紅魔館には手出しする訳にはいかなかった。

（確かに今のところ、レミリアは何も出来ていない……でも何かをしようとする動きはあるのよね）

手出しは出来なくとも、備える事は出来る——そんな状況の中、紅魔館の監視を行っているのが魔理沙とパチュリー、そしてアリスだった。

あの中で何が起きているのかは分からない……だが、何度か紅魔館周辺の環境が異常な状態になることはあった。その度に気休め程度の妨害はしてきたが、常に後手に回っているというのが実際のところだ。実情事態はまだ動いていない。だがいつ動き出してもお

かしくない。それが観測を続けてきた彼女たち三人の意見だった。

#### 閑話休題。

構成式とは、魔力を現実世界への影響力へ置き換える演算式のことだ。魔法使いはこの構成式によって魔力を自在に操る。魔法使いの最低条件は魔力の知覚だが、構成式を編めなければ魔法使いは魔法使いとして機能しない。

構成式を描くのは術者本人だが、それを空間に顕現させるのは魔力そのものだ。構成式は魔力の通過経路であり、変換過程である。基本的に構成式は術者によらず、同一の構成式を描けば同じ結果が得られる……と、言われてはいる。実際のところは、意味を理解しなければ同じ構成式を構築することは不可能だ。

「つまり、魔法使いとしてなにより大事なものは魔力を知覚すること、そして構成式を組むこと。この二つよ」

バシン、とパチュリーが一抱えもあるホワイトボードを叩いて力説する。ホワイトボードはアリスが人形達に抱えさせているため不安定で、フラフラと空中を揺れ動いた。そこに書かれている文字も線が乱れており読み辛い。

（何もあんなサイズを用意する必要はなかったのよね）

生徒はどうせフランドールひとりだ。紙とペンでも充分な筈だった——が、どうにも魔

法使いというのは雰囲気にとだわる。基本自分以外どうでも良い癖くせに見栄くせっ張りなのだ。  
 (自覚がない訳ではないのだけれどね)

自分のやたらと目立つ服を積み上げながら、心中嘆息する。地味な服、というのはどうにも合わない。自分ではなく、人形の真ん中に立つ人形遣いとしてのポリシーにだ。アリス・マーガトロイドは人形師であり、人形達を操る人形遣いでもある。華やかな彼女たちの中心に立つなら、それ相応の装いをする必要があった。

視線を僅かに落とし、自分と同じ金髪の小さな後頭部を見つめる。サイドポニーが可愛らしく揺れるその少女は、全身赤というこの中では最も目立つ服装だった。魔法使いとしての自覚は最も足りないが。

フランドール・スカーレット。悪魔の妹。今はさしずめ魔王の妹といったところか。一昨日から同じ屋根の下で暮らしている。紅魔館が閉鎖した直後は博麗霊夢の庇護下にあった。

三年間、フランドール・スカーレットは修行という名目で霊夢と共に生活していた。何の為の修行かといえば、レミリア・スカーレットが何かをしかしたときの為の修行だ——そのときは自分が行くと、フランドール自身が言い放った。

(その修行の成果がアレ、というのはちよつと……というかかなり、拍子抜けだったけど)

先日の修行終了を宣告した霊夢とのやりとりを思い出し、溜息とも苦笑ともつかない息が漏れる。そこから先はアリスたちがフランドールの身柄を預かる事になり、魔法関連の鍛錬を行う事になった。正直、フランドールの世話をこちらに押し付けただけなのではないかと俄にわかに疑っているが——アリスとしては、それでも構わないと思っていた。

(あんなお人形みたいに可愛い子ならいつでも歓迎だね)

パチュリーの講義に一所懸命聞き入り、フムフムと頷く度に背中の羽もぴよこぴよこと揺れ動く。生物としても悪魔としても異形の羽だが、アリスの目にはそれすらも可愛らしさを強調する要素としか映らなかつた。

それはともかく。

話はいよいよ本題に入るようだった。どうにもパチュリーの話は余計な話が多過ぎる。聞き飽きた魔法基礎の話ウンザリと反芻はんすうしながら、アリスは目の前の光景に集中した。

(パチュリーの言つたメチャクチャな構成式……どんなものかしらね)



例えるならそれは、自由落下に重力方向への豪快なブン投げを相乗させたような、落下

と呼ぶにはあまりにも生ぬるい——要するに、墜落だった。

自分の悲鳴すらどこか遠い場所の出来事のように感じる。実際は目の前で、口元で、半秒と経たない内に過ぎ去っているのだが。風を切るといふより強烈なボディブローと例えた方が確かな風圧をさつきから何発も貫っているのだが、その容赦無さは減衰するどころか加速している。気を失わないのは、そうすれば死ぬ事が分かり切っていたからだ——諦めたらそこでご先祖さまが総出で首刈りに来る。それが彼女の祖母の口癖だった。子供の頃泣いた。

「死ぬ……もんですくわあああああああ！」

持てる意志の力を総動員し、構成式を展開する。叩きつける暴風に持ってかれそうな意識を強引に繋ぎ止め、彼女は魔法を発動させた。

黒球が全身を包む。球体は分かり易いイメージに過ぎない。起る現象の本質は、描いた構成式にこそある。

黒球は地面へと近づくとつれ緩やかに速度を落とす——半分も速度を殺せないまま地面に激突した。

衝撃で半径二十メートル以内のもの全てが吹っ飛ぶ。無惨な更地を残したまま、黒球は音もなく消滅した。

こうして帰郷というにはあまりにも重々しく、霧雨・マリアベル・グレースは再び幻想郷の土を踏んだ。



組む。編む。織る。構成式を展開する事をなんと言い表すかは術者による。特にこれと違って定められた言い方がなく、構成式をどんなイメージで展開するかは術者によって異なるためだ。絵のように視覚イメージで魔力を弄る術者もいれば、数式のように計算だけで導く術者もいる。

「フラン。ちよつとコレと同じ事してみて」

そう言ってパチュリーは、掌の上に火の玉を出現させた。構成式には無駄がなく、展開も速い。とはいえ、この程度なら誰がやっても大差はない。

（力量を測るには役立たないと思うんだけど……）

「うん、わかった……」

アリスはパチュリーの指示を訝りながらも、フランドールの動きを注視した。掌を上に向け、意識を集中している。作り出す火球は小さなものだ。集中は一瞬のことだった。

魔法は、構成式を思い描く、描いた構成式通りに少量の魔力で導火線を引く、発動臨界以上の魔力を注ぎ込む、の三プロセスで完了する。ほとんどの場合は魔力の導火線を見ながら構成式を形作っていく事になる。

「えい」

刹那、とんでもなく巨大な構成式が空間に展開した。

（——っ！）

アリスは心の中で声にならない悲鳴を上げた。血の気の引いた頭で咄嗟に思い付いたのは防御の魔法だ。構成式に反応し、盾を構えた人形が目の前に踊り出る。アリスの魔法は、構成式に応じて人形達が行動する。

次の瞬間、爆発音と共に火柱が伸びた。天井に達したそれは木材を焦がし、真っ黒な落書きをそこに描いた。火が起ったのは一瞬だったためか、幸いにも燃え広がる事はなかった。

「……………」

全員、押し黙る。なんと言葉を発するか迷っている内に、魔理沙が寝癖だらけの寝巻き姿で現れた。

「なんだあ、朝っぱらから騒がしいヤツラだな……お、天井焦げてんじやん。ボヤでもや

らかしたか？」

呑気なものだ、とアリスは胸中で呟いた。魔理沙はフランドールと共に二日前からアリスの家に移り住んでいる。ふと視線を感じ、首を捻ると、パチュリーがこちらを見つめていた。

そのまま視線だけで会話する。不思議とお互いの言いたい事は理解し合えた。

——直すの、コレ？

——そうよ。構成式も天井も。

一言余計だ、とアリスは心中でボヤいた。

天井板を剥がして取り替えるべきか、補強で済ませられるか。腕組みして天井を睨にらんでいる内に、会話は先に進んでいた。

「時にフラン、貴女は魔力をどうやって知覚している？」

パチュリーの質問に、フランドールはツ、と指を顎に当てて考え込んだ。

「んーと……なんかね、ぼやーってあったかいのを感じるの」

「ということは、熱量？」

パチュリーに目線をやり、確認を取る。パチュリーは微かに顎を引いて答えた。

「だからこんなにも曖昧あいまいで大きな構成式になるんだと思う」

「えと、何かマズイの？」

フランドールは不安な顔で三人の顔を見回している。

「正直言って、なんでこれで魔法が成立しているのか不思議でしようがないわ」

「そうね……私にも意味がさっぱり」

パチュリーでさえ降参のポーズで首を横に振っている。フランドールの表情が泣き出しそうな顔に変わった。と、ボン、とその頭に着替えを済ませた魔理沙の手が置かれた。

「まあ構成式なんて人それぞれだしな、それで出来るなら気にする必要はないんじゃないか？……おいお前ら、なんだその顔」

「いや別に」

「よりにもよって一番説得力のないヤツが言ってるなー、なんて思っていないわよ？」

構成式は読み解ける。理論上、同一の構成式を描けば同じ結果を得られる。魔理沙の魔法を知っているアリスとパチュリーは、胡乱うろんげ気な瞳を彼女に向けていた。

「まあそれは置いておいて……やはり、これから魔法を教えるにあたって構成式はキチンと描けた方が良いと思うのよ。まさか入門レベルから始める事になるとは思わなかったけ

ど……魔力を可視化できるようにしましょう」

パチュリーの提案に反対意見は出なかった。とはいえ、

(出来るものを無理に変える必要はないと思うんだけど)

とは、アリスも思っていた。

「まあ、確かにフランチちゃんが何をしてるか分からないと教えることも出来ないしね」

とりあえず、言葉の上ではそう賛同しておく。

「最低限、連立構成式と擬装魔力系、それと重結合魔力子くらいはマスターしてもらわないと……」

「ちよつと！ ちよつとちよつと！」

が、パチュリーの発した単語に思わず待ったをかけた。

「なによ」

「なによじゃないわよ！ あんたは何をフランチちゃんに教え込む気なのよ。連立構成式はともかくとして擬装魔力系を使ってる魔法使いなんて今時いないわよ」

「私はバリバリ使ってるけど」

「それはアンタが古臭いから。あんな罵つたみたいにこんがらがった構成式、組むだけムダよ。それに重結合魔力子とか、一体何と戦争するつもりなのよ？」



「いやでも。あれば一撃必殺のとおきとして……」

「ないから。そんなシチュエーションないから。どんな仮想敵か知らないけど、そもそも魔力絶対足りないから」

一通り否定し尽くし、アリスはフランドールへと向き直った。

「こんなバカの言う事聞いてたら<sup>かび</sup>黴臭い魔法しか使えなくなっちゃうわよ。いいフランちゃん、組むならこんな風に綺麗な構成式を……」

そう言ってアリスは空間に構成式を展開した。フランドールにも見えるよう、自身のイメージを視覚情報として転写する。七色に光彩を揺らす構成式に合わせ、何体かの人形達がダンスを始めた。それは全体が調和を以って織り成す、バランスの取れた見事な舞踏だった。

「うわあ……お花みたいにキレイ」

フランドールの感嘆に気を良くし、アリスは人形達にお辞儀させた。それを見て少女が拍手を投げかける。

「そうね。だから……」

パチュリーの声が聞こえ、アリスの背筋に冷たいものが走った。

次の瞬間、統制の取れていたダンスがバランスを崩壊させた。人形と人形がぶつかり、

足をもつれさせ転倒し、あつという間にメチャクチャになる。

「こんな風に構成式を乗っ取られ易い。単発的な魔法でも簡単に防がれるし、読み合いの決闘では不利」

構成式の一部を書き換えられ、人形達の制御が出来なかったのだ。構成式に手を加えた犯人の顔をキッ！と睨みやり、アリスは奥歯を軋きらせた。

勝ち誇ったしたり顔でパチュリーは続ける。

「戦いのことを考えるなら、連立構成式を多用した高速化メソッドや擬装魔力糸による構成式の暗号化を習得すべきよ」

そう言ってパチュリーの展開した構成式は、素人目にも一目で高難易度と知れる複雑なものだった。それらを読み解こうとする間にも次々と新しい構成式が展開され、読み解きたいくつかは発動する魔法とは関係のないフェイクだった。

「でもそれらを習得するのに何年かかるかしらねえ……理論の理解に三年、実戦で使えるレベルにするのもう五年といったところかしら？ パチュリーさんは何年修行なさるおつもりかしら？」

グ、とパチュリーが言葉を飲み込んだのは、それがそうを外れた年数でもないからだ。彼女自身、最低でもそれくらいの年数はかけている筈だとアリスは踏んでいた。特に

あの展開スピードは一生ものの成果だろう。

「……魔法の修行は生涯を通して行われるものよ」

「なら一生待てと？ レミリアお嬢様はそんなに悠長な御方だったかしらねえ？」

言葉を失い、パチュリーの視線はますます剣呑さを増していた。もともと眠たげで不機嫌な目が、ドロリとした黒さをた湛え、不機嫌さに磨きをかける。

今にも手袋を投げつけて魔法を爆発させかねない二人と、それを交互に見遣って気を揉んでいるフランドールの三人に気安く言葉を投げかけたのは、魔理沙だった。

「フアイト」

「魔符『アーティフルサクリアイス』！」

「火金符『セントエルモピラー』！」

「ええっ？」

フランドールが驚きの声を上げる中、アリスとパチュリーは互いに投げ合った魔法の爆発の中に消えた。

「よし」

「よしじゃないよ！ なんでゴング鳴らしちゃったの？」

フランドールの抗議をどこ吹く風で押し退けると、魔理沙は強引に話をまとめた。

「静かになったんだからいいだろ。そんなことより、私はここを片付けとくから、お前は外でも散歩してこい。講師がぶっ倒れたんだから今日はもうオシマイ。自由時間だ」

後は何かを言う間もなく外に摘み出された。こうなると何もする事はなく、仕方がなくフランドールは昼までの時間を魔法の森で潰す事に決めたのだった。